



広瀬 瑞記

これだと思った。

これしかないと思った。

これ以上のものはないと思った

そして、何故今まで知らなかったのかと嘆いた。

学生の頃、たまたま聞いていたラジオから流れてきた音楽に心を奪われた。

その当時、好んで聴いていたのは所謂「J-POP」というジャンルの曲で、それ以上の音を求めなかったし、それ以上の音が存在しているとは微塵にも思っていなかった。

そんなごく一般の人と同じような音楽ばかりを聴いていた頃、私は「この人だ！」と思う人と「この曲だ！」と思える出会いを果たした。

その人と曲がきっかけで私はそれまで聴いていた「J-POP」というものを捨て、着の身着のまま「洋楽」と呼ばれる音楽に心酔していく。その曲を紹介していたDJと一緒に。

そして、私は洋楽について質問するならコイツの右に出る人はいない、という地位に付くことが出来た。

しかし、私はそれだけでは満足しなかった。より多くの知識を得る為に、何かをしなくてはならないと感じていたのだった。

そんな私がとった行動は、運命的な出会いを果たしたDJの出演している番組にリクエストを送り、いつか弟子入りさせて頂きたいとお願いすることだった。

ラジオを通じ、憧れの人と繋がり合えることが嬉しく、何回も何回も彼の番組にリクエストをしていた。

彼へ弟子入りするという意思を持って日々の生活を過ごしていた。
その未来を疑うことなど全くしなかった。

ある日、大学で授業を受けている最中、母親からメールが届いた。
私が憧れていた、私が弟子入りするつもりであった彼が亡くなったのだ。

私は彼を通じて多くの音楽に出逢った。そして、彼亡き今も私は多くの素晴らしい音楽と出逢っている。

そう、彼が居なくなっても世の中では多くの素晴らしい音楽が生み出され、そして多くの人とその音楽に心奪われている。

私はその橋渡し役を担いたかったが、結局それが叶わぬまま、ここまで来てしまった。

暑さと秋の風が共存する季節がもうすぐそこまで来ている。
彼と別れたあの季節がまたやって来る。

万年筆に憧れていた。

あの筆先、高級感、質感、インクの滲み。その全てに憧れて死ぬまでに一度は買ってみたい、使ってみてみたいと思わせる存在だった。

その万年筆を初めて手に取ったのは、就職活動期。大学から「履歴書は必ず万年筆で書け」と言われたので購入をしたが、何を怖じけ付いたのか購入したのはお手頃価格な万年筆。しかし、初めて自分で購入した憧れの文房具で履歴書に文字を書けるというだけでテンションは上がり、それこそ何十枚も必死になって書いた。

社会人になり、文字を「書く」ことよりも文字を「入力」する機会が増え、憧れの万年筆とは疎遠となっていった。

そんな或日、読書という共通の趣味を持った大先輩と話をした際、お気に入りの文房具の話題となった。私はその時、過去に忘れてしまった万年筆のことを思い出し、彼に万年筆への憧れを話した。

翌日、彼は「ペン先が固くて、使い難いからこれをあげるよ。これを使ってたくさんの文章を書いて」と言って私の手に一本の万年筆を握らせた。

今まで憧れだけ抱いていて、決して購入しようとする思えなかったパーカーの万年筆。キャップを取れば見えるのは金色のペン先。学生の頃に購入した万年筆とは違った重さ。

夢にまで見た憧れの万年筆が自分の手の中にある。別に大それた文章を書く訳でもないし、それで「作家様」を気取るつもりもないが、この万年筆を持てばどんな文章でも書ける、そんな気持ちになった。

その後、大先輩は実家のある九州へと帰っていった。

そして、彼と私は現代において珍しいとされるペンフレンドとなっている。

お互いに季節に合わせた便箋を用意し、互いにお気に入りの万年筆を使って相手のためだけに言葉を紡ぐ。

殺伐とした世の中を宛もなく生きていく私にとって、それはオアシスの一つとなって砂漠化しそうな心に潤いを与え続けてくれる。

そして、今も私の手の中には彼からもらった万年筆がある。

幼い頃から好きなものが、自分が望むようなものでなくなるのは些か面白くない。それが、「偽善」と取れるようなら尚のことだろう。

空気砲がよく使ってるけど、ひらりマントがあれば最強だよな。
あれ、格ゲーで使えたら余裕で全クリ出来るだろ？

そんなことを思いながら幼い頃、国民的な人気を誇る青いネコ型ロボットが出ている映画を見ていた。

いつ頃からだろう、この映画が「偽善的だ」と感じるようになったのは。

私がオトナになったから、そう感じるのだろうか。
幼い頃と好みが変わったが故にそう感じるのだろうか。

幼い頃に見ていたあの映画は、基本的にいつも戦っていた。
石ころ程度にしか思われない石ころ帽子なるものを被って敵陣に潜り込み、捕まりそうになりつつも、空気砲やひらりマントでラスボスまで辿り着き、最後は映画にしか出てこない道具やキャラクターによる自己犠牲により戦いが終わる、というのが「鉄板」という流れであった。

そんな基本「戦争」という展開がメインとも言える映画作品の中で、いつしか戦争を回避するパターンが出てくるようになった。

和平を結んで戦争を回避し、みんなで仲良くニコニコするという流れ。
争いがなくならない世の中において、お手本とすべき終わり方なのだろう。

お互いに血を流すことなく、ジャイなんとかの歌を聞かなくてすむのだから、双方にとってこれほどよい結末はないのであろう。

だけど、その取ってつけたような平和的な終わりが何故か鼻につくような感じがしてならないのだ。

私が子供を卒業したから、そのように感じるのだろうか。

否、そのようなことはないだろう。

以前の作品はパラレル世界での出来事がほとんどで、その中で人間ではない者たちと日常世界の統治を巡って争っていた。

しかし、いつしかパラレル世界も現実と同じ扱いになっていき、和平を結び平和的解決、もしくはラスボスの自爆という戦争回避というのが基本的な流れになっていき、空気砲もひらりマントの出番もなくなっていった。

あの映画でしか活躍の場がなかった石ころ帽子ですら！

それを「偽善だ！」と言ってしまう自分に問題があるのかもしれない。

いつの世も、私たちの世界の何処かでは戦争が起こり、多くの方が亡くなっている。そのことを擬似的とはいえ、国民的人気を誇るアニメで子供たちに判らせる必要はないという判断をしたのかもしれない。

しかし、あのアニメに出てくるキャラクターの性格が最も活かされるのは、人の優しさや勇気といったものを子供たちに理解させるのに「戦争」という要素は必要な気がしてならない。

ただ単に、私が昔からそういう争い系のストーリーが好きだっただけではないか？

と問われれば、「そうなのかもしれない」としか言えないのだが。

いつもお読み頂きましてありがとうございます。

今回の【グランギニョル】というテーマでエッセイを書いたのですが、『黒い牛乳』のコンセプトに合わないということでお蔵入りになりそうな作品を『考える葦にもなれない』に載せさせて頂きました。(「人間讃歌」というタイトルです)こちらと合わせてお読み頂けましたら幸いです。

広瀬 瑞記

Grand-Guignol [名][男] ①グラン＝ギニョール座(モンマントルにあった怪奇劇専門の劇場) ②グロテスク

grand [形] 大げさな

guignol [名][男] ①指人形芝居(の劇場) ②《話》道化者；こっけいな人 ③《話》役立たず；無能な人

《参考文献》

① 現代フランス語辞典 [第2版] 白水社

「十年一昔」という言葉がありますが、最近は時の流れが早いからか「五年一昔」の方が合っているように思えてなりません。

「まだ」五年。されど「もう」五年なのです。

最近、電車に乗っていると多くの方が使用されている携帯電話が「スマホ」と呼ばれる多機能携帯に移り変わっているように感じます。「ネットに依存している方が増えている」故に多機能携帯を所持するようになったのでしょうか。

それよりも、携帯を作る側が従来の携帯電話よりも多機能の方が便利だという宣伝により、そちらの携帯を選ばれる方が増えたという結果なのでしょう。

そして、その携帯の移り変わりに伴い、今までとは違った傾向が見受けられるようになりました。

それは、携帯を使用される方々の「手」の動きです。

よく多機能携帯を使用される一部の方が左手に携帯を持ち、右手で操作する、そんな姿が多く見られるように思うのです。

以前の携帯からすれば、それは年配の方が使用される時に見られた行動とみなされ、片手で操作する人からは一種、差別とまでは言いませんが年齢的な区分けの一種として見られている行為でした。

しかし、その年齢区分の最たる行為を、区分し偏見とも言える目で見ている方々の間で何の躊躇や戸惑いもなく行なっていることに疑問を抱いてしまいます。

何故、今まで己が冷ややかな目で行なっていた行為を、持ち物が変わっただけで行なってしまうのでしょうか、と。

別に私は、両手で多機能携帯を持つべきではないと言いません。

言いませんし、それを「止めなさい」とも言いません。

ただ、何故そうしてしまうのか、その理由が気になるのです。

多機能故に、操作性を重要視しての行動なのでしょうか。

それとも、ただ単に「持ち難い」だけのことなのでしょうか。

以前、とあるメーカーの多機能携帯の製品説明に「片手でも操作しやすい形」という謳い文句を見かけたのですが、メーカーのそのような思惑とは別に使用する人間はメーカーが求めた「片手での操作」ではなく、「両手で操作する」ことに重きを置いているように思えるのです。

メーカーとしては、実際に使用されている方の様子を見て、多機能携帯の形状を決めるようにすれば良いのですが、「片手」で操作させる為のものを「両手」で使われているのですから、逆に「両手」で使いやすい形状を選択する勇気も必要なのかもしれません。

そして、五年後くらいには今まで「非常識」と思われていた「携帯を脚で操作する」そんな主流がやってくるかもしれません。

来るべき五年後までに身体の柔軟性を高める体操を行ない、脚で携帯を操作するくらいまで器用にならなくては、未来での流行に取り残されるのかもしれません。

ここでカミングアウトします。私は決して「しっかり」していません。

ここでカミングアウトします。私は決して「真面目」ではありません。

私はズボラです。しかも、社会情勢に疎くて一般の常識というヤツが苦手で、友人たちがごく一般的に持っている常識や思想の斜め上をフワフワと漂いながら生きています。現実には生きていません。現を抜かしつつ、夢を繰り返しながら、何とか現実にしがみつこうと努力くらいはしています。

外見というものは、とても厄介なものだ。

外見故にこの人はこういう人だ、と私たちは予想し、そのイメージを崩すことなく付き合い続けようとする。恐らく、そういう風に付き合うことで自分が抱いた相手のイメージを崩したくない、とか、自分が相手に下した判断が誤りであるはずがない、という傲慢な考え故に自分が最初に抱いたイメージを頑に守ろうとするのではないだろうか。

でも、相手が勝手に抱いたイメージを押し付けられ続ける関係性というものは永続的なものなのだろうか。

結局、お互いに相手のイメージを勝手に決めつけ、それを押し付けようとする関係など、刹那的な関係性しか築けないのではないか。

そもそも、相手が抱いたイメージに合わせて自分を作り上げるということは、本来の自分を押し殺して付き合っているのだから、それって嘘をついていることになるのかな。

嘘をついて付き合うということは、もっと言えば、本来の自分を出さないということになるから、友人に裏切られても、恋人に裏切られても傷つかない。もし傷つくようなことがあっても、傷跡は浅くすむな……という打算が産み出した関係性の求め方のように思えてしまう。

ところで、私って「しっかり」していて「真面目」だと思われていませんか？

努力をしても実現出来なかったら人はどうなるの？

そもそも、それを目標にして生きる人って実際に何割くらいなの？

その目標を達成する為に何をしても構わないの？

「自己実現」という言葉の意味が判らない為、埃を被って本棚で眠っている国語辞書を開いて調べてみたが、「自己実現」という単語は載ってはおらず、「自己」と「実現」を分けて調べるといった結果になった。

結果、調べる前と調べた後での知識量は大して変わらないまま辞書を本棚へ戻した。

その後、あまり使いたくもないのだがインターネット上にある国語辞書で、その言葉の意味について調べてみた。

調べてみたが、「絶対的」やら「完全に」とか「自我」とかの文字が多くてゲンナリした。倫理説による言葉だということは十分に理解出来たが、その意味を理解しようとするれば、上記のような単語が所狭しと書かれていて脳が理解することを拒絶する。

理解は出来ないが、「あー倫理学にありがちな“逃避”の一種なのだな」ということだけは十二分に読み取ることが出来た。

「絶対的な自我を完全に実現すること」と言われたって何を実現させるのかが全く理解出来ないし、何がしたいのか全く判らない。

そもそも「絶対的な自我」って何のことだ。

「絶対的」なものを「神」と置き換えて考えると共感は出来なくとも理解をすることは出来る。己の資質や能力などを発展させて「神に近い、もしくはそれ相当の力を持つ絶対的な存在」になる、というように考えれば「あー、そういうことね」くらいの理解は出来る。

結局、神に近い存在へと、唯一絶対の存在に近付きたいと考える人間の欲望故の考えなのかと理解すれば、だったらソロモン王のようにバベルの塔でも何でも好きに築けば良いじゃないかとおっこみたくなる。

恐らく「自己実現」という言葉は、「人は何の為に生きるのか？」という問いに対しての答えなのだろう。

しかし、自己が持っている真の絶対的な自我を完全に実現する為に、社会の規則を破ってまでも達成を目指すべきことなのだろうか。

というよりも、この考えには人が「ずる賢く、悪事を働いてまで成し遂げようする」という考えが抜け落ちているように思えてならない。

なるほど。結局、わたしがこの「自己実現」という言葉を代表するような倫理学が嫌いなのは全てのベースに「性善説」というものがあるからなのか。

もし、そうなのだとしたら理解出来ないことはしょうがないことですね。

注釈

- ・ 自己 …… [対象として考えた時の] 自分。おのれ。
- ・ 実現 …… 実際にそうなること (できるようにすること)
- ・ 自己実現 …… 自己の素質や能力などを発展させ、より完全な自己を実現していくこと。自我実現。 関連語：個性化

《参考文献》

- ① 大辞林 [第3版] …… 三省堂
- ② 新明解国語辞典 [第7版] …… 三省堂

国が変われば、宗教も変わる。

宗教も変われば、食べる物も変わる。

アメリカからやってきた赤と黄色の某ファーストフード店は、国によってメニューを変えていると聞いた。

現に、インドに旅行に行った友人があちらのマクドなんちゃらでは牛肉を使ったメニューは一切なく、逆に鶏肉や野菜をメインとしたメニューでヘルシーな印象を持ったと話していた。

インド人の多くの人々が信仰しているヒンドゥー教では牛は神聖な動物とされていて、その肉を食べることなど許されることではない。また、牛のみならず、不殺生を主張している為に自ずと菜食主義者が多いと以前調べた時に知った。

イスラム教では、豚は不浄な存在故に食すことが許されない。

仏教もまたヒンドゥー教と同じく殺生を禁じるが故に肉を食すことを禁じている。

イスラム教といえば、豚肉禁止以外にも有名なものはやはり断食だろう。仏教では修行僧だけが行なう断食だが、イスラム教徒全員に義務として課せられ、またそれを施行すべきと努力する人々が多いことに驚く。

最も驚かされたのは、あの世界的なスポーツの祭典でのことだ。

この祭典が開催された時期がイスラム教の断食の時期と重なり、多くのイスラム教国の選手が日中は食事をすることが出来ないという過酷な条件の中で、キリスト教や仏教、ヒンドゥー教と戦っていたのだ。

ある国では、この祭典に出場しベストを尽くしてほしいからと断食を行なわなくても良いという御触れを出したが、敬虔な信者の多くは、「世界的な祭典だからと義務を怠るべきではない」と決断したと聞く。

誰もが世界ナンバーワンになりたいと望み、誰もが金色に輝くメダルが欲しいと戦っている中で、宗教上の義務を果たし、尚且つそれを言い訳にしていないのだから、ある意味正々堂々としているというか、何とも素晴らしいの一言しか出ない。

こういう宗教上の義務ということを考えると、逆に非難したくなるのはこの祭典を企画する側の立場にいた人たちだろう。イスラム教は陰暦の為、明確な断食の時期が判らないという点があるのかもしれないが、祭典の開催時期を決める前にイスラム教側に確認しておけば、このような事態にはならなかったのではないか。

そんなことを考えていると、如何にアメリカの某なんちゃらドナルドの方が柔軟に宗教に対応しているのかが見て取れる。某なんちゃらは儲けなければならないのだから、柔軟に対応せざるを得ないのかもしれないが、少しはそういう精神を見習って世界的なイベントを企画してもらいたい。

もっと早い話をすれば、イスラム教国がこういうイベントを企画し、且つ敢えて全ての出場者に断食を課せば、今回のスポーツの祭典で彼らが如何に過酷な状況で戦っていたのかを理解することが出来るのではないだろうか。

「この時間泥棒め！」

見ているテレビ番組がつまらないとついやってしまうのが、チャンネルサーフィン。特に当てもなく、何か興味深いものがやっているかとテレビをあちらこちらのチャンネルに合わせ、ただパチパチと切り替えることをするという人が多くいると思う。そんな私もチャンネルサーファーで、その日も一日の疲れを忘れるための酒を飲みながら、パチパチと切り替えていた。

そして、この日やっと落ち着いて見始めたのがとあるSF冒険活劇っぽい映画だった。登場人物を見ると、「アクションより俺の筋肉を見ろ！」とばかりに上半身裸で肉体美ならぬ筋肉美を惜しげもなく見せつけているシュワなんとかではないか。この映画の雰囲気と彼の迫力ある演技を見る限り、この作品は彼が映画デビューしたばかりの映画であろうことが見て取れる。やっと酒の肴を見つけたとばかりに、期待もせずこの映画を見ることに決めた。

見始めて五分が経過した頃に一つ悟ることが出来た。それは、この映画は「トイレに行くタイミングを計らなくても安心して見られる」ということだ。B級映画としては最高の証ではないか！と思いつつ、話の続き等全く期待しないまま見続け、やっと二時間が終了した。

学生の頃、アルバイトをしていたお店の社員さんがふと言った冒頭の台詞を思い出したのは、この映画のエンディングがやっと流れた頃だった。

社員さんは、やっと得た週末の休みをゆっくり過ごそうとその日テレビで放映していた宮崎なんちゃらが監督している『耳をなんとか』とか言う映画を見たらしいのだが、見終わった瞬間に「私の貴重な休みの二時間を返せ！この時間泥棒めっ！」と叫んだと話していたのだ。

そして、『コナン』とかいうSF冒険筋肉美活劇映画を見終わった瞬間、この社員さんの一言を身にしみて理解したのであった。

しかし、本当にこの二時間は無駄だったのか？と問われれば、決してそうではないのではないかと自己弁明している。

何故なら、このクソ映画に与えられた二時間の責苦から今夜のようにチャンネルサーフィンをした時にこの映画にまた出会っても「見ない」という選択肢を選べるだけの経験をしたのだから、決して無駄ではなかったのではないか。

何も知らなければ選んでしまいそうなものでも、経験すれば選ぶような過ちは犯さないであろう。

。そういう風に経験論を逆手に考えれば、これも一つの貴重な体験だと捉えることができるはずだ。

。

はずなのだろうけれど、たぶん愚かな私は今夜のように『コナン』とかいうSFおっぱいぽろり冒険活劇映画にまた出会うことがあったら「あーあのクソ映画か……」と言いながら見てしまうのであろう。

「日本話しことば検定」なるものがあるらしい。

友人が就職活動で必要となるから……と苦手な敬語を身につける為に受講していたのだが、資格試験にスピーチが行なわれるらしくスピーチ原稿を一生懸命作っている時のことだ。

スピーチのお題が「わたしの好きな季節」らしく、多くの学生のように好きな季節についてツラツラと理由を述べるようなスピーチ原稿を作っていると思っていたのだが、ふとした瞬間覗いてみると「わたしには好きな季節はない」という一文から始まっており、その時飲んでいたジュースを勢いよく吹き出してしまった。

友人曰く、「ただ自然に過ぎるだけの季節に対し、人の“好き”や“嫌い”といった概念を当てはめて考えることが間違っているのだ」ということらしい。

ただ過ぎる季節を愛でる、愛でる為に和歌を詠むということは別に良いらしいのだが、「寒くないから好き」という自己本位的な思考でもって好き嫌いを判断することがおこがましいことだということだ。

うん、理解出来ないことではない。

時間と共に流れていく季節を「好き」という概念で切り離してしまったら時間が経過されず、そのまま時間に取り残されたような感覚に……なるのだろうか？

更に友人は「季節を好き嫌いで言うのなら、日々流れている時間も同じように言えなくてはならないのではないか？例えば、15時は好きだけど、23時は嫌い、というように言えるのであれば、季節を好き嫌いで判別しても良いと思うのだが、実際に時間に対してそういう言い方をする人が居ないのだから、やっぱり季節を特別扱いすることに問題がある」と食堂で熱弁をしてくれた。

理解は出来ないことではない。

ただ、屁理屈すぎるような気がしないでもなく、「別にそこまで熱く語らなくても良いのではないか？」とすら思えてくる。

しかし、昔清少納言が「春はあけぼのお〜」なんて書いた文章を難癖つけて文句を垂れてた紫式部なんかは、この友人と同じような感覚を持ち合わせていたのかなーと思うと、「ああ……友人のように考える人は昔からいたのか」と訳も判らない安堵感を抱いてしまう。

そんな食堂弁論大会が行なわれた3ヶ月後くらいに、友人の資格試験の結果がやってきた。

筆記は文句なしの点数だったのだが、案の定、資格試験には不合格だったらしい。

どんなに美しい日本語を話せたとしても、協会の人が決めたスピーチ内容を愚弄するような内容であれば、それは落とされるよな、友人には言えないが心の奥底で思ったのであった。

初めて「個性的だね」と言われたのは何時の事か。そんなもんすっかり忘れてしまった。正確に言えば、「忘れてしまった」のではなく、「言われ過ぎて何時の事なのかも覚えていない」ということなのかもしれない。

生まれた時から近所でも有名な変わった子どもだった。淋しくもないのに、すぐに大泣きするし、歯固めが嫌いで、祖母に買ってもらったM何とか星雲から来た宇宙人のソフトビニール人形の頭を噛み付いたり、甘いお菓子よりも、乾き物を好んで食していたり、友達と外で遊ぶことも好きだがそれ以上に部屋の隅でしゃがんで迷路をするのが好きな子どもだった。

でも、自分ではそれが「普通」だと思っていた。

それが人と違う、変わった行動だという認識はなかった。

物心がついた思春期になって、とある新任の教師に「個性的であるということは素晴らしいこと」と言われたが、果たして本当にそうなのか？と考えた。

日本の教育では「普通」というものが求められ、「クラス」という限られた人数の中で皆が同じであれという教育を受けていたと思う。

他と違う考えや主張は、教師という絶対権力者により握り潰され、挙句お前の考えは「普通」ではないから改めろという脅迫を受けるようになる。しかし、そんな脅迫を受けたところで「普通」という概念が理解出来ないのだから、「普通」になることなど出来ない。故に絶対権力者に、「普通とは何か？」と問うたところで明確な答え等なく、どんよりと濁って要領の掴めない返答があるくらいであった。

じゃー「個性」とは何だ？と考えればそれすら答えられない。

人と違うことが「個性」なのか？

オンリーワンであることが「個性」なのか？

自分らしい生き方が「個性」なのか？

人と違うことが個性なら、普通の人を着ないような服や、普通の人が行わない行動をしたら「個性的」なのか？

雨が降る中傘もささず、手に持って歩く人は「個性的」となるのか？

自分らしい生き方が個性なら、右を向けという指示に従い右を向く人が大多数の中、敢えて下を

向いてしまうような人は「個性的」となるのか？

「個性的」という言葉をそういう風に考えると何とも陳腐な言葉のように思えてならない。

そうやって考えてみると、「一般的」や「普通」という言葉の反対語が「個性的」だと断言出来ないのではないだろうか。

幼い頃、祖母という人が三面鏡に向かって化粧をしていた。

私はその三面鏡というものが恐怖でしかなかった。合わせ鏡をすると鏡の世界に入ってしまうという話を信じていたわけでもないのに、ただ怖かった。

「わたし」という存在は数多く存在している。

いま目の前にいる「わたし」。私が考える「わたし」。そして、友人たちの中にある「わたし」。

私は自分も知らないうちに増えていく「わたし」を恐れている。

私の中には「わたし」が存在している。それは、友人すら知らないモノであり、私が知らないモノでもある。潜在意識の中にだけ存在しているのだが、その全てを理解しているわけではない。私が理解していると思っているのは表向きなものだけであって、深い意味での理解までは到達していないのであろう。

そして、私の中の「わたし」以外にも、私が知り合った友人たちの中にも「わたし」が存在している。

友人と会話をするということは、私の中にある「わたし」と友人の中にある「わたし」が互いに摩擦を起こさないように同調する行為なのだと思うようになったのは、友人の中の「わたし」に恐怖を抱いた頃からだろうか。

恐らく、私の中と友人の中に存在する「わたし」に差異が生じるようなことがあれば、「わたし」という存在は友人の中から消去されると考えるからなのだろう。

いつの間にか一人歩きし、私という実態が恐れる程にまで成長し続ける「わたし」という存在が怖いのだ。

私が飲み込まれそうになるから怖いのだ。

だから、友人に嫌われないように距離を置いて、付き合うようになっていく。
傷付けられても、深手を負わないように距離を置いて、付き合うようになっていく。

私は正直になって貴女の望む「わたし」を演じるだけ。
それは、嘘で塗り固めたわけではないのだもの。

だから、実態であるはずの私は自ら「わたし」という虚像に飲み込まれてもいいのだと判断する。
。

貴女の中の「わたし」が消えないのであれば、私は存在を消しましょう。

祖母という人が亡き後、あの三面鏡は使われなくなった。
一周忌を前に、久し振りに三面鏡の前に座ってみる。

三枚の鏡に映る私は本当の「わたし」なのだろうか。

— 気持ち悪い。

黒い牛乳

<http://p.booklog.jp/book/55419>

著者：広瀬 瑞記

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ch-run/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55419>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55419>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ